

「つながり」を生む授業デザインを目指して

—中学校国語科における教材研究の具体的方法の探究—

波多野 紗稀（平成 29 年度教育実践コース修了）

序. 教職大学院での学び

私は、子どもたちが、教材について学びを深め、さらに探究したいと思えるような授業を目指している。教職大学院における長期的な実習では、二つの中学校で教員としての見識を深めることができた。

1 年次・A校の実習では、子どもたちが学習活動の中で関わり合うことにより、一人一人の考えが変容するという気づきを得た。そしてそのような活動の中には「共有する場面」や「既有知識とのずれ」が効果的に取り入れられていると考え、授業実践に取り組んだ。

2 年次・B校の実習では、A校での授業実践や教師の姿勢から学んだ教材研究の重要性が課題となった。授業者がどのような意図で教材を使用しているのかを聞き取り、教材に関する研究会への参加・発表を経て、授業実践に取り組んだ。

本報告書では、私が中学校での課題実習に取り組む中で、教材研究の重要性について実感し、国語科における教材研究の具体的な方法を模索した 2 年間のプロセスをまとめる。

1. 目指す「つながり」とは

実習の過程で私が着目したものは「つながり」である。ここでは、「つながり」に着目するに至った経緯や、「つながり」の定義について概観する。

1 年次・課題発見実習は、特別支援学級と通常学級を行き来する生徒の支援から始まった。最初、どのように支援すればよいのか分からずに見守っていると、その生徒は周囲に「何をやる時間？」と聞いたり、隣の人の学習の様子を窺ったりしながら学習に取り組む様子が見られた。

これをきっかけに、他者と関わることについて考え始めた。5 月・新潟大学附属長岡校園の研究会にてキーワードであった「互恵的な関わり」「協働場面」や、大学院の選択科目「授業における学習研究」の中で学んだ「考えを共有するための道具の工夫」などを踏ま

えて授業観察を行った。このことにより、他者と関わる活動の中で、個人は、他者の行動・言動→自己解釈→改善・実践、といった学びを得ていることが明らかになってきた（図 1）。



図 1 個人の学びが変容するプロセス

私は、このような、生徒が他者から学びとる姿を「他者とつながった状態」として捉え、授業の中で生み出していきたいと考えようになった。

さらに、子どもたちの学習を見守るうち、国語科で育む力は直接的な関わり他に、過去の記述（時間）やフィクション作品（空間）といったものを含む様々な思考とつながる能力であると再考した。生徒が授業で関わり、学ぶ「他者」とは、同じ環境で学ぶ生徒であり、教科書を媒介して出会う書き手であり、登場人物などである。そして、これらの「他者」と関わり、学びを深めていくことで、子どもの言葉に関する力、特に伝える力・他者とつながる力を伸ばしていくことが国語科の意義の一つであると私は考えた。

では、それぞれの他者とつながる状態とはどういったものなのか、授業観察をもとに次のように定義づけた。

○ 教材と生徒のつながり：教科書教材や関連資料を読み、内容や構成を学んでいく中で、事象への関心が高まったり、学習した内容について活用し、表現していこうとしたりすること（探究的側面）。

○ 生徒同士のつながり：交流から他者の考えを知っていく中で他者理解をしたり、自身の考えが変化したりすること（協働的側面）。

さらに、このような「つながり」が見られた授業で

は、共通している二つの手立てがあることを学んだ。一つは、自由な発言の機会や、黒板の使用によって他者の考えや行動が共有される場面を設定する手立てである。もう一つは、生徒自身の考えや既有知識が他者の考えと違うことに気づく手立てである。課題検証実習においては、この二つの手立てを取り入れることにより、「つながり」を生む授業づくりを試みた。

2. 「つながり」を生む手立てに着目した授業の実際

1 年次・課題検証実習では、課題発見実習で学んだ手立て「共有する場面」「既有知識とのずれ」に着目して二つの授業実践を行った。授業の実際を次に述べる。

11月に行った中2の単元・評論文「君は「最後の晩餐」を知っているか」（以下、授業実践Ⅰ）の1時間目では、A校のα教諭の実践をもとに、拡大版「最後の晩餐」を使って、「最後の晩餐」に対する考えを共有する場面を設けた。その結果、絵画について想像を膨らませた仲間の姿を参考に、自分自身の考えをもつような生徒の様子が見られた。しかし、2時間目以降は、ワークシートや活動の指示が不足し生徒の学習が滞ることや、生徒自身は個人で考えようとしているのに対し「とにかく声を出さなくては。」と焦って指示をだすことが多かった。これらは、私自身が教材を学ぶ価値を十分理解した上で、授業を構想することができていなかったためであると振り返る。

また、2月に行った中1の単元・文法「単語の性質を見つけよう」（以下、授業実践Ⅱ）では、教材を学ぶ価値を考えるために、教科書に掲載されている、「単語カード」を使用した学習活動の意図について考えた。そして、生徒が以前学習した文節の区切りを「既有知識」として、単語の性質を見つけられるように単語カードを工夫した。授業は、β教諭と連携し、3クラス（そのうち、2クラスが波多野、1クラスがβ教諭）で行った。授業では、楽しそうに単語を組み合わせながら、文節との違いに気づく生徒も見られた。しかし、私の担当したクラスの生徒は、前時の振り返りや復習する場面で、学んだ用語が出てこなかったり、仲間分けが十分でなかったりと前時の学びを生かしていない様子であった。β教諭の授業と比較すると、β教諭は単語カードを黒板に貼りだしながらまとめているのに対し、私の授業では

口頭のみでまとめているなどの違いがあった。このことから、授業実践Ⅱは、意欲的に活動したことを学びにつなげられるような授業構想が十分にできていなかったと振り返る。

授業実践Ⅰ・Ⅱのいずれにおいても、授業を計画する段階で教材自体の価値を見いだすことや、目指す子どもの姿に向けて展開を練り上げること、といった「教材研究」が不足していると分かった。そこで、2年次・課題達成実習においては、「教材研究」に焦点を当て、「つながり」を生む授業づくりに取り組むこととした。

3. 教材研究こそ「つながり」を生む材料

1) 教材研究の重要性

まず、国語科の授業づくりの基礎に立ち返るため、学部生時代の文献にあたった。益地憲一（2009）は、「授業が成立するためには、生徒（学習者）・教師・教材（学習材）がそれぞれの役割を十分に果たすことが必要」であり、よい授業は、これら3要素が「響き合う関係にある授業」と述べている。これまで、生徒と教材、もしくは生徒と生徒のつながりを重要視し、教師がそのための手立てを講じるイメージで授業に臨んでいた。しかし、このことから、教師自身も、教材や生徒と関わる中で考えを広げたり深めたりする一員としてあることが重要だと捉えた。

これと関連して、鳴島甫（2009）は、教材研究を「素材的研究」「指導的研究」「反省的研究」の三つの観点で述べている。素材的研究は教材自体を正しく読み取ること、指導的研究は授業で教材を扱う意義を考えること、反省的研究は、授業改善のために教材の適切さを見直すことである。

2) 教材研究の実態—B校の国語授業から学ぶ

授業者は授業に臨むにあたってどのように教材研究を行っているのか。2年次、新たに配属されたB校の国語科の授業観察や、授業者の聞き取りから、授業者は日々授業に臨む上で次のような取組をしていることが見えてきた。

ア： 本文の読解

イ： 教材研究会等の聴講／発表

ウ： ワークシートの読解／作成

エ： 教科書指導書の読み込み

このような取組を教材研究の具体的方法・内容として参考にし、授業計画にあたった。授業計画の過

程では、鳴島（2009）の素材的研究、指導的研究を意識しながら作成を試みた。3）以降は、授業実践の経過で行った教材研究の具体的方法・内容を時系列に沿って述べる。

3）授業実践Ⅲにおける教材研究・授業の実際

5月に中2の単元・説明文「生物が記録する科学—バイオロギングの可能性—」（以下、授業実践Ⅲ）を行った。

《素材的研究》

● 本文読解・書籍との比較（ア・イ）

教材は教科書のための書きおろしであり、具体的な説明（本論）では、実地調査の内容を取り上げ、疑問表現を用いながら論を展開している。研究会で紹介された筆者の著書と比較すると、本文の元と思われる実験について詳しく述べられているが、教科書中の本文の方が成果を大きく取り上げて表現していることが分かった。

● 参考文献から筆者の見方・考え方を学ぶ（エ）

教科書指導書に記載されている参考文献と、教科書会社ホームページで紹介されている関連リンクをもとに筆者の見方・考え方を考察した。ここから、想定したデータがとれるか不安を感じながらも、新しい発見に出合えるかもしれない期待をもちながら研究を進めていきたいと考える筆者の様子が共通して窺えた。

《指導的研究》

素材的研究から、本教材は、筆者の説明しているバイオロギングの可能性への理解とともに、筆者の研究に対する姿勢から生き方を学び、課題解決に向けて主体的に取り組んでいくことについて考えられる教材であると私は考えた。そこで、筆者の研究の経過を追っていきながら読み取り、筆者の思いや考えについて思いを馳せながら学べるように計画した。

《授業の実際—教材研究の課題を見つける—》

授業では、言葉を類比したり、言葉に込められた思いを想像したりしながら取り組んでいる様子が見られた。課題として、内容・表現に分けて分析できる読み教材の指導研究や、学習の系統性を生かした導入の練り上げが挙げられ、次回の実践で改善を試みた。

4）授業実践Ⅳにおける教材研究・授業の実際

7月に中2の単元・情報活用「メディアと上手に

付き合うために」（以下、授業実践Ⅳ）を行った。

《素材的研究》

● メディアとの関わり

B校では、朝学活等の時間に生徒が最近の気になるニュースを発表している学級がいくつかある。日常的にもテレビ、インターネットからの情報を話題にしている生徒が多い。このことから私は、生徒にとってメディアは大変身近なものだと考えた。

● 各教科書内の同単元の扱いを比較する（ア）

各教科書会社の情報活用のページを比較すると、B校が使用している光村図書の教科書のみ、情報活用に関する説明文が扱われており、他社は実践するものが多いことが分かった。

● 本文読解（ア）

● 学習指導要領で系統性を分析する

取り上げられている説明文を授業実践Ⅲのふりかえりをもとに内容・表現に分けて分析を行った。その結果、取り上げられているメディアの特徴を長所、短所に整理して述べられていることが分かった。

さらに、学習指導要領で系統性を分析した際、中1における情報活用の目標は「必要な情報を読み取ること。」であった。説明文の導入は、必要な情報を読み取ることにはできるが、メディアの特徴を理解していなかったために失敗する、といった系統性を生かした導入になっていることが窺えた。

● 関連ホームページ・書籍で学んだことの実践（エ）

筆者が出演しているNHK動画教材や、メディアとの付き合い方を述べている筆者の著書を確認し、述べられていたことを日常生活で実践した。これにより、日常的にみられるメディアの特徴を体感し、授業で目指す生徒の姿をより具体的に考えられるようになった。

《指導的研究》

素材的研究をもとに、「メディアの特徴を踏まえ、メディアの活用を日常で実践できる・意識できるようになること」をねらいとして構想を練った。そのために、講じた手立ては次の三つである。

- ◇身近で実生活につながるような学習課題の設定
- ◇既習の不十分さに気づき、探究を促す導入の設定
- ◇授業の流れを可視化する／学習の内容を整理するワークシートの活用

《授業の実際—授業実践Ⅲの反省的研究を経て》

授業では、教科書に書かれているメディアの特徴

を基本としながら、「調べる手間はどうか。」と生徒自身が日常で活用することを意識してそれぞれのメディアを吟味し、取り組んでいる様子が見られた。また、私が素材的研究で体感した、テレビの「編集されている」という特徴について触れた時は、生徒の発言が連鎖反応を起こし、授業をしていて楽しさ、心地よさを感じることができた。

4. 「つながり」の材料を効果的に用いて探究を促す
2年間の集大成として臨んだ中2の単元・評論文「君は「最後の晚餐」を知っているか」(12月実施。以下、授業実践V)では、これまで学んできた教材研究の具体的な方法・内容を効果的に用いて、生徒と教材とのつながりを生み出そうとした。

《素材的研究》

● 本文読解・書籍との比較 (ア)

方法は、授業実践IVと同様である。本文は教科書のための書きおろしであるが、同様に「最後の晚餐」を取り上げている著書があったため、比較した。その結果、取り上げられている話題の比重に違いがあることが分かった。

● 教材の配列・目標の変遷 (エ)

● ジャンルの特徴

教材が記載され始めた当時から、目標や配列が変わったことに焦点を当てた。現在、この教材は教科書中の「根拠を明確にした説得力のある表現を学ぶ」に位置づいている。学習指導要領で求められている力の変遷も踏まえ、本単元を学ぶ意義をとらえようとした。

そもそも「評論文」とはどのようなジャンルであるのかを説明的・論理的文章を研究した書籍、文献や事典をもとに調べた。ここから、評論の特徴とは同調させようとする表現や、その言い回しのおもしろさであり、そのことが「説得力のある表現」として位置づく一つの要因ではないかと解釈した。

《指導的研究》

指導的研究では、より生徒の思考の流れをイメージできるよう、新潟大学附属新潟中学校の単元構想の枠組みを参考にして学習指導案を作成した。また、生徒が探究し、教材とつながるための手立てとして次の四つを計画した。

◇拡大版「最後の晚餐」(約1/2スケール)の提示

◇つぶやきシートの作成

◇語句・表現を比較する活動の設定

◇要点のみ記述した文と比較する活動の設定

《授業の実際—反省的研究を授業の中で生かす—》

1時間目に拡大版「最後の晚餐」を提示すると、生徒は「やばい」「すごい」と言いながら絵に駆け寄っていったが、それら感想の理由をうまく形容できなかった。この様子から、拡大版「最後の晚餐」は生徒の心を揺さぶり、「筆者はどうしてかっこいいと思ったのだろう、どのような理由があるのだろう。」という問いを探究する核となったと考えた。また、「つぶやきシート」の記述からは、これまで学んできた類比を意識したり、表現から想像したりしながら本文に対して丁寧に読み進める様子が見られた。このような生徒の姿から教材を見直し、3時間目以降の単元構想を修正した。

単元最後の振り返りでは、ノート提出者24名中8名が「レオナルドの他の作品も見てみたい」「今回の筆者の視点で他の絵も見ていきたい」といった、次の探究につながるような感想をもった。また、筆者の意見に賛成か反対か述べている生徒や評論文の記述からレオナルドへの愛を見つけるなど想定以上の記述も7名に見られた。このような生徒の記述から、絵の比較や修復にまつわるエピソードなど、教科書に書かれていないことにも思いを馳せ、主体的に学んでいたことが分かった。

5.まとめと今後の展望

以上、教職大学院における学びの軌跡を述べてきた。この2年間、「授業づくり」を核として、現場の教職員の方々の理解と支援のもと、授業の観察、教材研究、授業の実践を行い、学びを深めてきた。

そして、2年間の学びの集大成である授業実践Vでは、教材研究を「つながり」の材料として、絶えず分析と改善に努め、生徒と教材とのつながりを生み出す授業に近づいたと考える。なにより、この2年間を通して教材研究自体の楽しさや、授業で生かすことの喜びを感じることができたのは、今後学び続ける教師として現場に出る私にとって大きな成果だったと言えるだろう。今後も研修を積み重ねるとともに、年間を通じて、主体的に学ぶ意欲や力を子どもに身につけさせるために、学級担任、教科担任として、どのように子どもたちと日々を築いていくのかという点について、教育活動を支える多くの方々に学び、自己を成長させていきたい。